

三十四  
583  
1

特



桂園竹譜目次

卷之一

總論

吳竹

かたたけ 毛ちく

かこしあたけ かこる竹

またけ 小かた

かこたけ ちよ竹 女竹

志ぬ 一の

たかしの おかしの

寒山竹

卷之二

の やたけ

一種矢竹

通絲竹

鳳凰竹 玉用竹

村松竹

臺明竹 青葉筍竹

一種大名竹

一種大名竹

業平竹

蕩竹

疎節竹

尺八竹

三不竹

いもろ竹

篋蕩竹

沈竹

卷之三

むらさき竹 胡麻竹

寒竹 孟宗竹

ころ竹

玳瑁竹 紫弱竹

黄金竹

金明竹 金竹

高麗竹 ちぢ竹

瑤瑁竹

漢竹

一種またけ

おきま竹

孟宗竹 己せたけ

布袋竹 琉球竹

佛面竹 佛肚竹

卷之四

亀文竹

鶴膝竹 鼓槌竹

高節竹

四方竹

實竹

ぬたまた竹

左右枝竹

球竹

羅漢杖竹

南京竹 慈竹

卷之五

す、 やまたけ

篇遊久 沙古丹竹

着竹

さう、うを

こまさう、 やきんさう

ちまきさう

五枚篠 おかめさう

さう

龍鬚竹

児篠

附録

竹如意 大龍

方竹刀

桂園竹譜卷之一

總論

竹の物不見えたるハ日本紀ニ鹿葦津姫の三子とらめ  
る時齋席と載し竹刀化して竹林とす」と初とす

神代卷云皇孫天津彦火、瓊、杵尊取鹿葦津姫又名

之開即一夜而有娠皇孫未之信曰羅復天神何能一夜

之間令人有娠乎汝所懷者必非我子歎故鹿葦津姫忽

恨乃作無戸室入居其内而誓曰吾所娠若非天孫亂必

當燻滅如冥天孫之亂火不能害即放火烧室云、一書

云初火欲明時生兒火明命次火炎盛時生兒火進命又

曰火醜片命次避火炎時生兒火打彦火々出見尊凡此  
三子火不能害及母亦無所少損時以竹刀截其兒臍其  
所棄竹刀終成竹林故歸彼地曰竹屋和訓粟よあをひ  
えハ竹ハ青く刀ハひや、かふるものなすこいまた  
其義とらひ

さきと其竹林のいまた生出さる先よ竹刀よつくると  
竹あまをそれより以前ふ自然生の竹ハあまなり正  
二伊弉諾尊の湯津凡擗と投たまむり化して筍と成  
しあまも其義ハ明らむこれふつききてハ隘玉老翁ま  
た玄擗と以て地よ投しが竹よ化せいと抹て大目鹿籠

を作しハ竹籠を作し初め

一書云彦火々出見尊持凡火酢芥命之幸鉤入海釣魚  
遂失其鉤不知所求乃彷徨嗟嘆時有一長老忽然而至  
自称隘玉老翁乃問之曰君是誰者何故患於此處乎彦  
火々出見尊具言其事老翁即取囊中玄擗投地則化成  
五百個竹林因取其竹作大目鹿籠内火々出見尊於籠  
中投之干海

天津彦根火瓊々杵尊のあま降きて國見したまむり所  
を長屋の竹島といひ

一書云彦火瓊々杵尊干時降到之處者呼曰日向襲之



高千穂添山峯矣及其遊行之時也到于吾田笠狹之脚  
碕遂登長屋之竹島乃巡覽其地云、案云竹島といは  
るハ竹の生茂まる島なりまた薩摩の曲小と同名の  
島あり詳小下文に見えたり

とこ小と自然生の竹ありしなり又大足彦忍別天皇弟  
媛の家より幸せんこし給ふし時具よしと聞て弟媛の竹  
林小隠きし

景行紀云、天皇幸美濃、左右奏言之、茲國有佳人、曰弟媛、  
容姿端正、八阪入彦皇子之女也、天皇欲得為妃、幸弟媛、  
間乘輿車駕、則隱竹林云、

竹林もまた自然生よりて物の化せし小あらん其自然  
生の竹を以て堤小植らきしハ坂手池と作しし時と初  
こし左とこまを以て人の名とせしハ丹波竹野媛其化記  
業重仁紀十五年春喚丹波五女納於掖庭弟一曰業酸  
媛云、弟五曰竹野媛と見えたり是即同名なり  
上野君祖竹葉瀬仁徳紀と初とこ又伊久美陀氣多斯美  
陀氣の名ハ雄略天皇の御歌に見え

古事記云、夜麻能加比カヒ尔多知邪加由流波毗吕久麻加  
斯母登滯尔波伊久美陀氣深斐須惠滯尔波多斯美陀  
氣深斐云、

初瀬の河は流きこし伊久美那閑と以て箏と作て笛と  
作てよしハ春日皇女の歌ふあり

繼體紀云昔母利能能兼都細能等政度那城例俱摩然  
閑能以能美那閑余囊閑漢等陸鳴磨昔等你都俱利須  
衛陸鳴磨府或你都俱喇云

竹の筏を作て薩摩の曲と死と免しハ門部金三つふ  
人よて

孝德紀云秋七月被遣大唐使人高田根麻呂等於薩摩  
之曲竹島之門合船没死唯有五人擊胸一枚流過竹島  
不知所計五人之中門部金採竹為筏泊于神島凡此五

人經六日六夜而全不食飯於是饑美金道給祿

箭竹二千連を筑紫と送て下せしハ太宰府の請へるよ  
よまて竹を

天武紀云十一年十一月癸卯朔甲辰筑紫太 請儲用

物絶一百匹云々箭竹二千連送下於筑紫

又名用竹名湯竹細竹目刺竹宇惠竹辟竹打竹の名ハた  
か小萬葉集よ出

刺竹以下ハ一種の竹の名ふあらた

河竹又作川竹吳竹斑竹等の稱ハ詳よ延喜式よ見え  
たり其河竹と若竹の字と填めしハ知名鈔よ辨色立成



竹取物語云翁うちなきてよめる吳竹の世このたけ  
こゝ野山よもさやハとてしきわーとのを見く

古今集の序は吳竹のよふ小きこえ又吳竹のうたふ  
と人よひ

後世の歌は世に及ひらきぬといへる小吳竹を冠  
辭せしハ竹取物語及古今集を以て初こを

又延喜式は吳竹を以て莒の足こせしこあるよふれ  
ハ

延喜式踐祚大典祭火遊一荷湖莒ニ合吳竹也足霞以  
縁須夫一人

次其二枚喜以曝布吳竹  
也足夫一人

此竹の吳國よを来ぬハ醍醐天皇よをハるかよ以  
前の事なり

堀河百首は吳竹ハ色しかをらて瑞籬の久しき代よ

了縁ぢりかゆこ公実卿のよめる歌ゆを其みつかき

ハ即崇神天皇の宮名ぢれハ吳竹ハ蓋しそのころ吳

國よを来りしハ小間ゆれハ此みつかきハたぐ久

しきといふ詞の冠辭ぢれハあかち小崇神天皇の

時ハ此竹渡りしハつふよめらハ其名萬葉集よな

きふと平城天皇の比よハなきハのなること明ら

る

抑石清水臨時祭ハ天慶五年四月二十七日ニ起リ平將  
門乱逆報賽也ト江家次第小見えたれニ竹臺と作ら  
れハハツのきハと天慶より以前の事なれを恐らくハ  
醍醐天皇の頃ナもと知る也ウラハ叔公事根元五十番  
歌合小寄竹臺恋といハる顯ユテ入道天綱言ハよそ小  
見ハ雲井の慶の川竹の記ヨのぬハとうとき中ウ明  
こよめを其顯ハ竹臺とありテ歌ハ川竹とありテ  
禁秘抄ハ竹臺ニツとい也ハ小具義ユクハ竹臺とこれ  
と後世の人或ハ竹臺といハルハ吳竹臺との心得ハ  
疎漏の至ナクとの吳竹河竹二種と葉の廣き細きと

よリヤとて辨別セハ徒然草と初コ

徒然草云吳竹ハ葉細ク河竹ハ葉ひろク河竹ハ近き  
河竹ハ一ト仁壽殿の方小ヨクテ植ラセたる竹ハ吳  
竹ナリ

五種竹の昔ヨを歌ハヨク来ト一とわねよを不集め  
書ニトセハハ八雲御抄と初コ

八雲御抄云竹かえ、くれ、むら、い、さ、ふえ、  
ふ、な、よ、こ、の、源、氏、う、  
ハの、エ、の、あ、ら、  
つ、の、た、り、む、ら、こ、と、む、を、む、つ、を、を、求、め、ハ、竹、を、

そまゝ下りてハ和漢三才図会大和本草等各其種類  
と載るといふと僅ふ十餘種にして漸く本草一家言  
に至り頗る増補ありといふといふまた穿鑿と遂さ  
を以て大略二十餘種に過ぎぬ抑竹ハ皇朝固有のもの  
といふこともまた近時海外より渡りて物も多し今を  
以てこれを見ても其種類殆百種と近かりぬ一扱西  
土の書に只竹と称するものハ全く大なる物にして蘇  
と称するものハ即小なるものなる

日本紀云篠小竹也此云斯奴

故小竹宮小竹祝小竹田の類ハ皆其字の如くなまこ

竹林竹屋竹若竹の類ハを處て大なるものとさして  
ふ凡後と作るハ古より大竹を用うるを處て一篠類  
の小竹を以てこまを處て作る時ハ忽ち水中小沈して絶て  
其用ハなまを處るに又竹林竹屋と必ま篠林小竹屋と  
かき置ていへるハ何らに於てれを古小竹と称する  
ものハ即大方のものにして只其名なきのまを處て  
既よ萬葉集ハ刺竹字惠竹辟竹の名ありといふこと  
との竹ハ必ま名湯竹細竹目とさしていへるものあら  
ま且刺竹字惠竹ハ原より一種の竹の名ハあらざるも  
よれ名湯竹細竹目の外小蓄より別種の大方なるも有

しなまされと後世のことく小をきくの名ありて區別  
せしむの小ありされををまひて竹との名稱一或  
ハ刺竹字惠竹ありて歌ありよめるとのありて和漢  
三才圖會引云赭晉氏以木為梳二十四齒取疏通之義  
又云柳齒疏者曰梳其齒細密相比者曰枇キ  
篔篹亦全古者以竹為之細齒相比凡百有餘齒故曰篔  
後用木故字亦作枇、本枇杷之枇、俗假借用之矣  
以竹為之可去髮垢又枇類可以取蟻虱者曰篔音と見え  
たきこぬふくぬと古もまた今の如柳ハ竹木の二種と  
以て作まる物なりと魚一憶ハ伊弉諾尊の湯津凡柳と授

給りて化して筍こなる

湯津凡柳ハ篔篹抄ハ凡の形小似たる柳なりといひ  
又凡ハ妻字の意なりといひ又湯津ハ湯津桂の木小  
て作き、柳なりといひと魚

監正老翁の玄柳化して五百箇竹林こなるとい其本ハ  
柳ハ竹柳かしてそれの化して筍小と竹林小とをいし  
ここち竹日の化して竹林こなることこの義全く一  
様なりと魚

田穢活法云宋景公賤死於雷詔還葬洛陽過公安民  
皆迎祭斬竹禱地以掛紙錢焚之尋復生成林邦民神之





歌曰麻岐年久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美  
由比能比賀氣流美夜多氣能泥之泥陀流美夜并能泥  
能泥婆布美夜云々

然るを或人の説よ皇朝自然生の竹ハ生ぬて篠類ハ一  
て大竹ハ皆後世外國より持來ルハ繁術セシナリト  
いぬ事これハ魏志倭人傳よ其竹篠類杖支といハる文  
よよゆそそのいぬものハ多ク也ト云々トそれハ全く我  
産物のナリ一をわ不ふと西土出テ書記セシものハ  
此を或ハ我海濱諸島ハ多ク篠類の小竹と産まハ  
と云々其一偏ハ拘り多クさうハ國中ハ大竹ある事と

あらた

案よ出雲風土記よ久宇島有白木小竹又葛島有椿松  
小竹ヨ見えたり今も伊豆の大島よ土の竹と産し備  
中矢の島よ々々矢竹と出その類殊よ多ク也と海濱諸  
島上よりハ心を篠類ハ生まハるものなり既よ神代卷よ  
素盞鳴尊のみ見清之陽山王三名狹漏彦八島篠とい  
ハし其神の所名ヨ々々篠ハ諸島上よ産まハる物なり  
と知る也志村知孝の説よ水辺蘆葦と生まハる堤  
畔必よ篠類と産ま篠類の蘆葦ハ少ク也不見茅の  
如し所ヨ々々あらさる事ナリ凡篠類ハ既上古より

我々多くあるものやねを大竹もまこと必すおひ出  
とのふりあつてついで佐藤成祐の読よ肥後の小國  
といふ所より二里をうけて山間の人家をき所を過て  
豊後の肥田といふ所を行くよとの間小竹村めを具  
名ハ忘れたまふといひて其所ハつと高き土山ふ  
て其山頭又大竹成萬幹羣生して水田ハ絶てなく只  
畠のまじりハあつてつと其畠も夏のころハ  
ふのつらさ筍を生して板こらうねを忽ち小竹敷と  
あつかく竹の多き所故ふ上人の家居ハ皆竹を以て  
作れを床ハさうあつて柱も障子も薪まこと皆竹を用

うりやうをこの男女ハ終日竹のこころのまわつて  
て別小農業を勤むるこころをなすこれハ古くは竹  
村をきくと三度の飯かと竹箒のわしたかと糶こ小  
児の時よを瘡瘡もつと軽くして壯健なるこころ世ハ  
たくひふくまふ別小悪病も煩ふ事ちりねを匠と頼  
むこころをなすといふれのと主人ハわあを頼ふとの語  
しりや又筍を製するふい柔きころ採て湯ハ浸し或  
ハ蒸なりして日ハ乾し用わの時ハ水ハ浸し煮て食  
まふ小具味殊ふと銘し凡半里餘を左右皆竹林ハ  
て其道傍ハ材木と積たつもの如く竹を切て積置或ハ

輪竹の如く近國一歩一又屋材の用も供を凡とかく  
の如く竹の夥多あり所ハ世ハまたとありまじき  
のを収其家君のさゆハ皆人ニの巧よまめせて面白  
く作りしものるれをなめく近年の物ハあらん憶  
ふこれと太古よりの竹林をりしものハ必  
虚誅よあらしきをありし。

又ハ信濃加賀或は出羽の雪國ハ古よの大竹絶  
てありしことなした、熊笹類壽の類のまめして出羽及  
ハ陸奥おも南部領ハ至してハ生涯竹と見さるもの  
とありし、續西遊記に見えたる。

續西遊記云を履て暖國ハ竹よく生育を寒國ハ竹  
よありし信濃國ハ竹一本も生せし甚不自由なる  
事竹を桶の輪ハ竹ハあらうれを叶ハ難き故三河  
尾張下を輪ハ作りて送り来り甚高直なり登の点  
つるハ山茅と用う大なる茅あり故ハ多くハ竹の如  
くありしこれと用う他よを思ふハ格別ありて又相  
應よか一月の間の、生さるも天地の物なりこれ  
よ北方或は出羽奥州と南部領ハ人民一生竹と  
んさるものありし太き竹ハ絶てなくこれ故人家の辺  
よ南國の如く竹叢といふものなり山中ハ笹ありしこ

まも熊笹あり竹の用ふ立べき物あり南國のて  
ハ竹程人家の重寶なりとのいやく一日もなきて叶  
いぬやふ覚ゆれうと斯のこころ竹あくてもこの  
み不自由なり様よとるえ只桶の輪の何方ありて  
も難義よ見ゆ津輕秋田辺よりハ榎の木皮の様よ  
名ゆりとのと曲て様ゆりとも桶こし用う又太き木  
とらをぬきたりともるゆ辺エハ人民ふいとま多き故  
丁寧なり細工として用ハ足るぬみや  
こきふらぬも皇朝まつとも竹ハ駿國の産ありて寒  
國ハ絶てなきとの言を恐らくハ西土の人めくる事

と傳へ聞て漫ふ其説となせしともるゆりたるさハい  
ハ魏志載る所全記より既ハ藤原氏支といつと栲支  
ハ古より國産絶てこれあり事ときり又其地無牛馬  
虎豹とつて虎豹ハ原より我産ふありとつとも  
牛馬ハ殊ハ神代より多し又男子無大小皆露面文身と  
いつと文身のとのハ至賤の最極猶やるとのたまふ  
去も所ありて豈これと以て男子無大小といふ人や其  
他神功皇后の殉葬奴婢百余人なりといふもまた傳聞  
の記よりぬも魏志の説原より信よりふたりたをれハ  
うともあれ皇朝自笑生の竹ハ皆藤原のこころして大竹な

或字恐惑之

きまのあつゝハとの説うしめあつゝ日本紀云、捕鳥部萬夜  
迷匿篁藪以繩繫竹引動令他或己所入

崇神紀云、物部守屋大連資人、捕鳥部萬將一百人守難  
波宅而間大連、滅騎馬逃向茅渟縣、遂匿山云、有司遣  
數百衛士圍萬、即驚匿篁藪以繩繫竹引動令他惑己  
所入、衛士等被詐、指搖竹馳言萬在此、萬即斃箭、一無不  
中

肥前風土記云、值嘉島有篁篠荷見

伊勢風土記、桑名郡出名竹、舊生野多異竹、尾張風土記  
云、長師山出名竹、富樫山出修竹、遠江風土記云、英名郡

貢修竹、大神鄉貢竹、葦、駿河風土記云、鳥渡郡產修竹、舊  
河郡貢樟竹

和名鈔引孫恂切韻云、篁竹藪也、注音皇和名太加無良、俗  
云太加波良及ひ竹と多計と訓まろハ即長高の意なり  
心もとも其義ハ明らるゝ又竹取物語ハとと即か竹  
の中よると三寸許りの人のいとくつと一きと湯とこ  
んえたす

竹取物語云、いまハむのたあるまの翁といへるは  
のあつゝり野山よまらとて竹をとらつゝよらつゝの  
事ハつゝのひりり名をとさるゝ氏のみやつとこぢんい

ひらりその竹の中ふととてつゝの竹ありん一とちあを  
うらあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
それと見れを三寸討おらんといふことしうらあやうらあや  
すあやれ云やうとて朝こゝろ夕こゝろと云ふ竹の中ふ  
おととちあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
こゝろあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
てやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
みゆあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
ちう竹のあやうらあやうらあやうらあやうらあやうらあや  
員當竹中有人三寸許云々員當竹節中有物長數寸絶

似人形俗謂之竹人契冲河社云溪漢書西南夷傳云夜  
郎者初有女子流於遼水有三節大竹流入足間聞其中  
有婦声剖竹視之得一男兒婦養之及長有才武自立為  
夜郎侯以竹為姓案華夷花木考また此文と載せて  
大同小異ありまた初め小施州竹王祠の目及の首姓  
の下に夜郎侯祠即此宋崇寧賜靈惠廟額十四字あり  
それハ作て物詔少とせよ其形さうのふ三寸許といふ  
とも其人の出るふとの竹ハ必とて上の竹よりてハめを  
からん

竹取物語はかくや燈の月の都よのほらんといふ時

の菊の舞の竹の中へを見つけきこえたりかこぢ  
たぬの大ききおとせしとわかたけたりならふま  
やしあひをさるるこの子とついでとつと小さき  
の竹の中あそぶを名つけおせし中へあれとそれ  
小さきこととつふ物のおとせしを初めふ三寸許  
とつとるの具実いかくや惟の全形なり又ほよ  
竹のかくや惟こ名付しハ女も連を母竹ハ心ま  
なま竹の中よりおしふよをそよあ名つけしあハ有  
つりり

これまた上古より皇朝の大あり竹のあを証とせし

一 叔西土の説小竹を以て君子小比をとりハ蓋して天  
地の知を稟て堅貞の操と全く虚心正直にして歳寒  
とつとつとさらふ変せさるふよをそよを故小王子猷  
ハこれと嘯詠して何可一日無此君とつとハ蕭穎士ハ竹  
篇と作して君子秉心惟其正直とつと既小詩衛風小  
也綠竹猗猗有斐君子とつと竹を以て君子小比を  
事具由来最高しこれを皇朝とせしと古より佐漢阮瞻能  
担弥用明記刺竹之大官人 萬葉集  
尉辞考云刺竹ハ立竹也古事紀ハ夜久毛多都伊豆毛  
とありと萬葉集ハ雲刺出雲ニかき古事紀ハ意富





只刺竹このミいぬるちり後小吳竹のミたマこくと  
めらゝ植らまゝ其頃より自然生の竹とて亦隣近く  
よあると以て吳竹小對してみかゝ竹とい名付し也  
かゝるを刺竹ハ全く河竹ハ一て蓋し今のま竹なる  
一ノ叔結後拾遺ハ加茂臨時帝試樂の日舞人かゝ  
の竹折をよと亦覽して霜さむらふの押頭よるん  
竹の大官人の袖かつとちりと後醍醐天皇の御製ハ  
全く古事談ニ所謂一條院御時帝試樂ニ実方中  
將の吳竹枝と押頭とせらまゝ旧例よるんその事な  
れとこのさま竹ハ即吳竹よして今つふ品とい其竹

異なりとつととととの刺竹と以て竹臺のよのミ  
かのハ其義全く相同しされと嘉元百首小刺竹と  
さく竹小轉し篠竹字と以て大官人の冠舞のせハ  
全く古人の意とと足失ハの甚しきとつとハ一或  
人云刺竹のさま竹ハ建字ハ一て亭々ミ一て直上を  
る義やその高く建てると以て君子の徳と比して  
つと竹をまた北斗のさま方向と建つふ今も其文  
小踏みそハおきとよむとこ水まゝ一説あり  
と歌よとよみ終ハ和漢人情を極て一つあつた故にこ  
れを以て君少と大官人とも其徳と比していハるや

又其用とす時ハ中々凡草衆木の及ふ所ハあらん  
まの弓材ニナリ矢料ニナリ旗竿ニナリ幡竿ニナリ竹  
束ニナリ竹簾ニナリ篋ニナリ杖ニナリ傘骨ニナリ扇  
骨ニナリ簫笛ニナリ鬘菜ニナリ床蓆ニナリ編筵ニナ  
リ籠篋ニナリ柱杖ニナリ花尊ニナリ水滴ニナリ杓ニ  
ナリ箸ニナリ松明ニナリ火繩ニナリ筆管ニナリ烟管  
ニナリ釣竿粘竿ニナリ搦<sup>カ</sup>ニナリ簾ニナリその用殊ハ  
多くしてさらば其徳と君子ハ比<sup>レ</sup>毛<sup>レ</sup>のミ<sup>レ</sup>あらん矣ハ  
天下の良材なり又六月晦日の夜禁中として節折としてト  
部竹と以て御たけの寸法とて奉り御もらへつとむ

る事ありこれハ御たけのたけと此竹とをのころハ同  
しきあり且竹やとよくかゝとのハなきありて旧  
くして此物を用ゐ来りてもの御り也  
公事根元云晦日夜ト部竹のよと庭中の席上ハおろ  
節折の命部竹とて参りて御たけとて御り  
この寸法とて果て宮主のまゝとあはれかゝせし御は  
らへつと御りあらたへあはれとて二度あり二  
度とて祿とたまふ節折とてよとてとつふ竹とて御  
たけの寸法とてとて其 二折ありかゝるなり  
同書五十番和歌ハ節折といへる類あり秀長朝臣の

霜さくたけのそめせハあらたけのそめせの袖ハ  
ふゆやまゆらんこよめをこれハ六月よりあらそ  
二月よりこの事のふゆをそめせ

又籜ハ知名籜引蔞切瀨籜竹王大皮也注小籜知名筍  
乃宇波加波和蔞三才岡会小籜可以織履可以縫笠又堪  
裏膠節淡竹籜淡赤乾色苦竹籜黄有黑突潤色山城嵯峨  
為上丹波次之若杖蔞液又次之筑前安藝其次也三見え  
たす又古より竹葉竹茹竹瀝と用りハ常の事なり三  
葉揉みハ凡蔞竹不拘淡竹苦竹取生竹身去節水洗破作  
細條判如麻豆使用須臨使施切不可判過歷日若至細者

不佳又枯竹無効又云竹身兼竹葉竹瀝之雙効近日博施  
甚覺捷功三見えたり今案小神農本草經名醫別錄以下子  
母秘錄揚氏産乳等小竹根と用りハ事あり其効生竹身  
よりまさりゆと世の人これを用的きハ甚だ惜む一  
きの至ちり友人志村知孝嘗て画と學て竹と好む其真  
を写せ小至るとハ精義入神と力といふ也一日予々  
弊廬よ来り世小梅品櫻品ありて竹品なし本草一家言  
中との目と載るといふこと其書絶て傳らるに因て今  
再ハ其種類を集めて大成一以て世の缺漏と補むこと  
いふゆふまかせて予もまこと原より其志ありふると

漫不固陋を顧みず行録に諸書と採擇し以て和漢の稱  
呼を辨し或ハ舊説の謬誤と正し以て其意を應よるに  
のハ文政十一年五月十三日なり

### 吳竹

吳竹ハ古より仁壽殿前の北の方小うありまじし竹あり  
即淡竹の一種細小なりとの也故小今俗またこれとさ  
してはらくとのハ漢名と筭竹一名鉗竹といふとの高  
さ大抵一丈許りて枝葉極めて繁茂し其状頗る淡竹に  
彷彿たりとのつとらと毎節却て淡竹よりと密かして高  
し順朝臣の文字集畧と引て筭ハ篁に似て節茂り葉  
まじとのをりとの知名といひ兼好法師及ひ一條禪圓の説小  
も吳竹ハよの常の竹より葉細しと延喜集 漏鳴 一ハる  
曉隨筆  
ハ即こま竹を凡吳竹の名ハ古今和歌集竹取物諸等ハ

見えたり此三万葉集のハハまたその名と載せたり其  
れを此竹の吳國より来りたる平城天皇よりハハ  
又後のことなりと思ふ日本紀畧弘仁四年  
天下の吳竹こしく枯しよ見えたりとの天皇よ  
りも以前ふこの種の渡りたるのありしと見え  
吳竹臺河竹臺と作りしとをいふ詳るらざる  
つとむいこ蓄くよりの事なりとの吳竹臺の竹の  
枝と折て臨時祭樂の時又実方中將の挿頭花の代へ  
らきこころ古事談に見えとの臺ふ生せし筍と採て  
これと石灰壇とて焼て奉りしハ清涼殿とて御酒臺の

日なりよ同書ふ見えまた吳竹と以て木燧及ハ  
箕茅の臺の足ふ作りしこハ延喜式に見え人多く庭  
院ふ植ひきて杖と名し或ハ格子の櫺子となすハ  
和漢三才圖会に見えたり今江都のハ此竹と以て火  
又炙り漉と去て曝し竹となし作簾家の用ふを名し或  
ハ若竹と採て釣竿となし其枝ハ別ふ縛束して苦竹と  
その柄こし以て掃帚と名し其使用殊ふ多し又日本紀畧  
又天下の吳竹悉く枯るといひハ此竹のこ枯てとの  
條の竹ハ枯るこことなり意を以て本朝辨疑又寛文六年  
より本朝の竹悉く枯て皆根と断つ淡竹の外ハハ

こいへるふとの意全く同一なりといふは古小吳竹の  
稱を力申のハ即淡竹の類なることこれをも押ら  
る魚

延喜式踐祚大嘗祭云木燧一荷綱莒二合吳竹者足履以絲纒夫一人次折四枚

綱以布袋吳竹次奠二枚裹以腰布吳竹

和名類聚鈔類竹云箬竹文字集畧云箬音日揚氏漢語抄云吳竹也和語云久體

太似薑而節茂葉滋者也

徒笑草云吳竹ハ葉不とく河竹ハ葉むろし柳葉小らか  
或ハ河竹仁壽殿のかわりしを植らせたハハ是竹  
なり

榻嶋曉隨筆云吳竹と申といふハ歌ふとぬハ只竹の總  
名の中よりよめ多の然ハあれとてをしくつてよめ  
常の竹より葉細きをまた河竹といふハ葉細し  
古今和歌集序小序に云この人にとりきて又まくれ  
る人も吳竹の世に小きことわかれ糸のよめをふたえに  
とわかれり  
古事談云一條院御時臨時祭試樂実方中将依違参不賜  
柳頭花加舞之間進寄竹臺許折吳竹枝挿之優美之由満  
坐盛歎依之試樂挿頭永用吳竹枝  
又云一條院御時於清涼殿有御酒宴之日讚岐守高雅朝

臣奉仕包丁左府拔竹臺筆石灰壇ニテ焼テニ井申ケレ  
ハ度々聞食ケルヲ高雅朝臣微音ニ本自引戸ハト云ケ  
リ  
和漢三才圖會云筭竹和名久禮太計又有澤竹唐竹葉皆  
異品也今案攝和名筭竹即淡竹之類細小黃潤長不過  
丈人多植度院可以為杖或為格子櫺子佳  
日本紀畧云弘仁四年十二月癸巳云々此歲天下吳竹實  
如麥其後枯盡

本草經疑云寬文六丙午年ヨリ本朝ノ竹悉ク枯テ皆根  
ヲ断ハク夕ノ外ハ不枯花サキ実ノリテ枯タル竹ハ其

性温ニノ用ニ不立海人驗之

集注本草云一種薄殼者名耳竹葉最勝証英本草引

子母秘錄云治胎動取耳竹根煮汁服全上

楊氏產乳方云療胎動安胎方甜竹根煮取濃汁飲之全上

竹譜詳錄云甜竹生河内衛輝孟津皆有之葉類淡竹亦繁

密大者徑三四寸小者中筆管尤細者可作掃帚筍味極甘

美以司竹監禁製故人罕得而食又名筍竹

高陽縣志云耳竹筍最甘美

和歌

竹取物語翁うらりるあきとくよめ 吳竹のよくのたけ

いそおふ 少とふふ 小とふふ 小とふふ 小とふふ 小とふふ

釋名

吳竹

日本後紀、古今和歌集、揚氏漢語抄、竹取物語、江家次第

この竹とも吳國より来る故小名つく

算竹

知名抄引、文字集畧

案小知名抄注小算音甘、こんをたまことも算ハ、とて俗字なれと母子作ると云ふこと

胡竹

集注本草、揚氏産乳方、竹譜、詳録

正誤

和漢三才圖會云案算實中行也本草無算竹

案小本草小耳竹こあかハ即算竹少竹冠小後少也のハ却て後世の俗字なり、こハを本草小竹と一云ハ誤りなり、ま、こハを實中行なりといふハ其説始りて唐韻不見えたり古説ハハあらじ

大和本草云苦竹因俗吳竹ト云又真ト云

案小吳竹ハ即淡竹の一種なり然ると今苦竹ト云ハ誤り

圖經本草云耳竹似薑而茂即淡竹也

案小耳竹淡竹ハとて兩種なり故小集注本草小耳竹淡竹の二竹とあけり淡竹一種薄殼者名耳竹と見え



食療方よと淡竹上耳竹次と云々たる所をその義明  
らあり又和名新よより小篁字ハ即篁字の誤なりと  
おなたけを云く

おなたけ一名おなたけ一名おなたけ一名おなたけハ西土  
よいよりの淡竹一名水竹也その高さ凡二三丈圍三七  
八寸よしてよして地上より一二尺の間ハ節密よて毎  
節相去るこ二三寸それより以上ハ節疎るること六  
七寸より或ハ八九寸よする其節の合たる貌上節少  
く高く起るといつとと下節の籜の脱せし跡よりと稍  
低しこれと細査する時ハ毎節上ハ細小粒の如きとの

横よならひ有てその力大さ頗る罌粟子のこころこれ  
全く細根ミかりぬきとの地と離きを発する事能ハ  
さると以て皮中小具きこいと合めたりなるを此種又高き  
ものハ地上より十五六節或ハ十七八節以上ハ始めて  
枝と生し丈低きものハ十一二節或ハ七八節以上よて  
は枝と生するなるその始の枝ハ双枝少く其次の一節  
ハ獨枝と生し又其次の一節より以上ハ皆双枝なりと  
あり又始めの獨枝にして其次の一節よりハ直ふ双  
枝なりともありと大抵ハ始めより双枝のものが多く  
して独枝の少なり凡枝と生して双枝なりハ始の一節

の左枝ハ太く右枝ハ細く其次の一節ハ右枝ハ太く左  
枝ハ細く毎節相互小かくの如くして梢上ヨ至る其双  
枝より又小枝と生し小枝より又細枝と分りて其梢こ  
ら小おのく葉をつく其葉長さ二三寸廣さ三分計りて  
其先二葉相對し三葉ハ其下よりきてとつて五葉と一  
節と又三葉のもの及び二葉相對して其葉細小なり  
ものゆるきこつとらとれハ全く年とつて下葉のかか  
れを枯落して必そその性質ありあり又ちちくの本  
竿節ハ末竹より低こつとらと枝節ハ却て末竹よりと  
高く其状頗る鶴膝の如く一収其枝とまをりかこハ左よ

てと右少とと節上より竹身ハ細長ちり一道の四所あ  
りて枝と生せざるかこハ全く四圍なりまゝ其竹身を  
へて白粉と帯るといつとらと殊尔下節の本の周圍ハ純  
白なること恰も壹分許小截し白紙を別貼せしめ如  
し或人云舊より相接國小田原より大竹こよりそのありと  
即淡竹より其竿高さ三四丈圍三八九寸ありて先こ  
けた故小嫩竿籜竿の用ハ必をこれと供よりちや今  
ハ此竹林領主の所領より漫不採ること禁まると以  
て或ハおのめ竹もといつとらとちちちちちちちち  
の方言たあり古今ハありとめりら一収ちちちハ四

月の頂筍と生して籜上は細線ちり、紫紋埋及ひ細毛あり  
了てま竹のこと或斑花ありことちりとの籜の先又一  
小籜葉と生しての傍ふちりきたり細毛あり其毛玉蜀  
黍の毛小似て至て短し又頗る海蝦の殻皮より生る赤  
毛のことし此筍味淡甘小して苦味あり事なきを以て  
世多く庖厨の料にそと筵喜式小加茂神宗齋宮階徒人給  
令料筍子二十一把こありと此淡竹筍ちりし又蘇沈  
内翰方小降苦竹外悉謂之淡竹といふと本草綱目小  
ハ誤矣といひ竹譜詳籜ハ恐未盡然と見えぬをさし  
と齊民要術小竹者中國所産不過淡苦二種といふハ

其言沈氏小勝ま

知名類聚鈔云淡竹廣韻云淡楊氏誤詔抄云淡竹於條多介竹者也

倭漢三才圖會云淡竹白竹俗云波其筍籜白味淡且其竹

色亦白節間從淡苦竹大者四寸長二三尺

大和本草云淡竹淡トハ不苦ナリ東坡淡竹ハ苦竹ニ對

シテ文ヲナスト云筍ノ味且美ナリ其皮不苦竹不同無

斑文褐色ナリ苦竹ノ皮ノ民用トナルニシカス苦竹ヨ

リ筍早リ生ス

本草綱目啓蒙云淡竹ハ一名水竹俗云ハチクト呼フ

其筍早ク生シテ味甚ナラス籜ニ斑ナシ其竹ニ白粉ア

本草綱目云今南人入藥燒漚惟用淡竹一品因薄葉間有粉者

本草綱目云淡竹有大小二種此竹汁多而甘沈存中言苦竹之外皆為淡竹誤矣

竹譜詳錄云淡竹屬之有之凡三種南方者高二丈許大概與筴竹相類但節密皮薄節下粉白甚多葉差小筍箨上有細紋無斑花北方者止高丈許葉入藥者良筍食不佳匠方用竹漚唯出此竹者最好筍出土正黑色者為烏花淡沈內翰存中筆談云淡竹對苦竹為文陸苦竹外悉謂之淡竹

不應別有一品謂之淡竹後人不曉於本草內別疏淡竹為一物今南人食筍有苦筍淡筍兩色淡筍即淡竹也以今考之亦恐未盡然也竹品雖多各有名色淡竹自有此三種豈可一概言爾竹嫩時可造紙也

本草綱目云淡竹其竹類可製為紙漚可消疾

詩

本草綱目

淡淡竹

直髓之烟梢千嶂外娟之粉節一溪中疎飄細響送疑雨寒動清陰似帶風



釋名

於保多計 和名抄引揚  
氏漢誌抄

此即大竹の義なり

とちく 食用竹筒俵和  
漢三才因全

東雅云とちくハ白竹なり

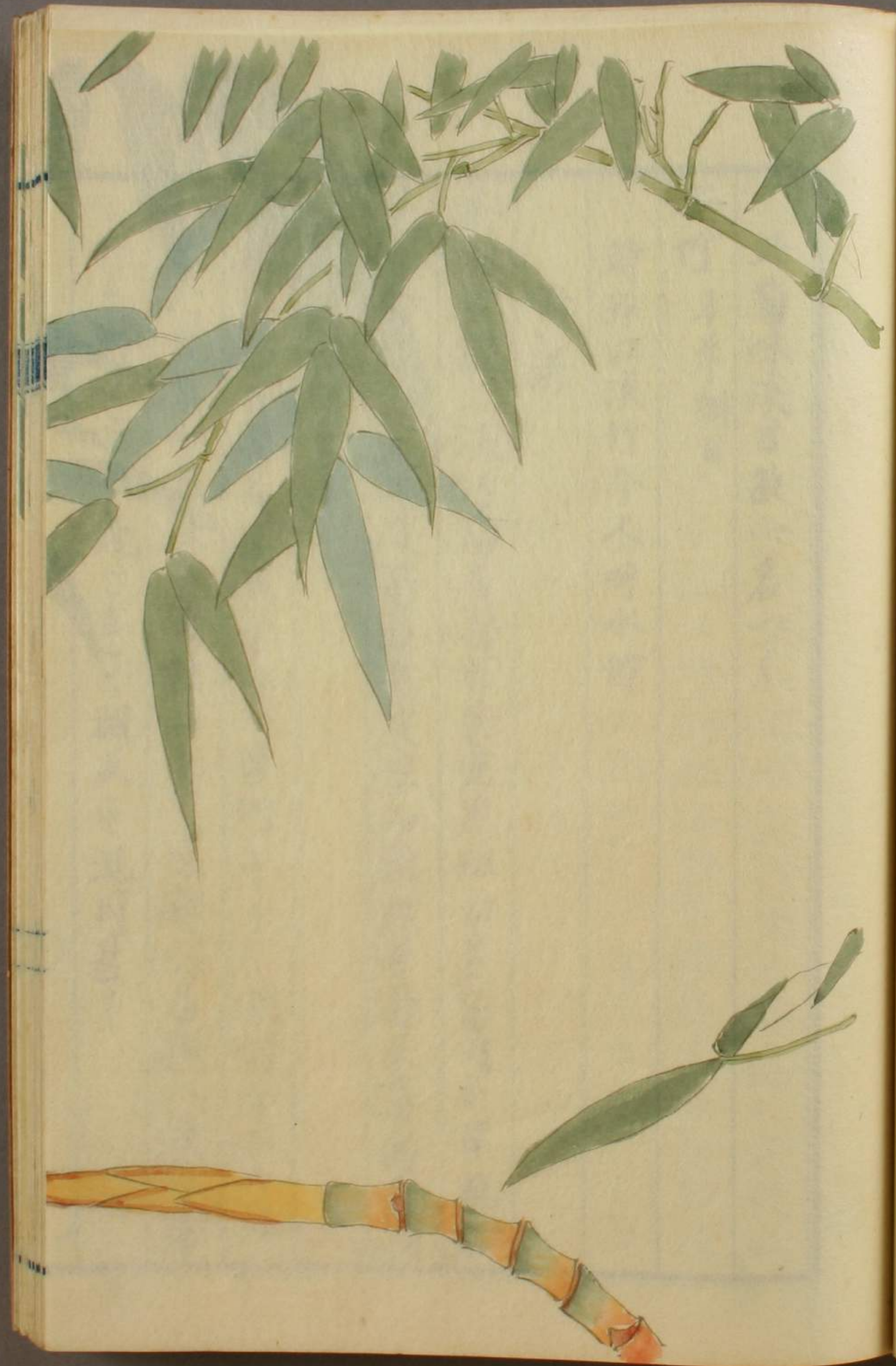
からたけ 嶺南抄異  
名裝記

此即漢竹の義なり其意吳竹小目

あまたけ 多藏編

あまハ即淡字の義なり

淡竹 名匠別錄





此筍味淡再故小名つく

水竹 本草綱目

時珍曰淡竹今人呼水竹

正誤

本朝食鑑云淡竹筍者籜有紫黃黑斑而美筍肉亦可脆碧  
色有香大美又云淡筍籜者皮厚而難敗苦筍皮薄弱易損  
雨

按籜有紫黃黑斑 之のハ苦竹にして淡竹ハあり  
また皮厚而難敗ハ苦竹にして皮薄弱易損ハ淡竹籜  
なり野心大の説こそと相反を混同甚し

汝南圃史云貴竹即淡竹笋苦不可食

案之字彙又篁音貴と見えたるをこまふより小貴篁も  
とよむ音通ふまを貴竹ハ即篁竹よして淡竹とハ全  
く別種なり

かこしる竹 かしる竹

かこしる竹一名かしる竹ハ漢名を篁竹一名水白竹と  
いふこま即ちちくの一様なり故ふその状をいつてもち  
くこ一様にしてたゞ全身白粉ありて霜のことと異  
なりとを凡西土の説に篁竹似淡竹而促節大者宜刺舩  
細者可為笛國經本草 竹譜詳録ハまた淡竹南方者高二丈許節

密皮壽北方者止高丈許竹譜 詳録ハ一るよふぬを被土と

産まるとのハ二竹とて小促節にして皇國ハ産まると  
の毎節疎にして高三四丈と至るとのハ得あらしとて  
ふとともこれを風土のまうらしてむる所にしてうらふ  
別種ふあらん

國經本草云篁竹似淡竹堅而促節体凹而質勁皮白如霜  
大者宜刺舩細者可為笛

竹譜詳録云篁竹屬に有之大似淡竹堅而促節體凹而質  
勁節下粉白如霜大者最宜為舩蒿細者亦中雜用

釋名



かまゝろたけ 多識篇  
本草綱

かまゝろハ即皮白の義なる

かゝろたけ 本草綱、本  
草啓蒙

此即かまゝろ竹の首呼なる

葦竹 名目別録  
因經本草

案、葦字正文葦小作ロ一、葦ハ菜の名、と説文小

根如薺葉如細柳と見えたり、此竹また細葉葦の如し

故、名つく又本草知名云芥竹注云仁言音竹正作葦

と見えたり、葦字竹冠に從して

水白竹 本草原始

案、淡竹の一名と水竹といへるハ本草綱目に見え  
たり、此竹また淡竹に似て全株白色なり、故に水白竹  
と名つく

正誤

類聚名義抄云葦竹ナヨタケ

物品譜云葦竹和名ナヨタケ又メタケ又カハタケ

案、小なる竹ハ紹興府志に載る所の苦竹にして葦竹

といハ別種なり、葦竹ハ因經本草に堅而促節大者宜刺

細者可為笛と見えたり、竹ハ其節間極めて疎か

て笛より作るへられざる、と舷と見えたり、つらさ

其誤いとして明らるゝこの二書篁竹となすたけ  
といぬる共々誤りなり

竹譜詳録引新安志云、篁竹筍類、深筍不可食

葉よりろ竹ハその筍はちくこ同しく味淡丹なる  
と今不可食といはるハ少の、こまに西土ハ篁  
竹の一種ハその筍食ふへうりさるものありやうた  
かふ也

またけ小か竹

またけ一名小か竹ハ漢名と苦竹といひ筍と甜苦筍と  
いふ近道所在これありとのハ多く細小のものなりと

いへこと七青梅練馬村及い下総松戸辺小出るものハ肥  
大にして圍ミ一尺餘長さ三四丈に至る其根上より二  
三尺の間ハはちくと同しく節密よしてそまよを以上  
ハちちくよを七節疎なる其密ちちハ毎節相去ること  
凡四五寸よしてその疎ちちハ一尺よを一尺五六寸よ  
至る其節の合たる貌本竿も枝節も皆一様よして上節  
高く起りて下節ハ極めて低し正小をちくの竿竿節ハ  
低しといへこと七枝節ハ却て高きものハその状全く  
異なり此種又高きものハ十七八節以上を始て枝と  
生し大低きものハ八九節その至て細小なりとのハ或

ハ四五節より上を枝と生を具咎の枝ハ獨枝にして其次  
の一節よりハ双枝なるもまた始よりハ双枝にして絶て獨  
枝なきはありて一様ありてこゝりともこれハは  
ちくところハ推上の數節小壹分許の小黄牙ありて旧  
年の竹今年小壹り新葉と生とありハ其黄牙ありて  
うら抽出て小青筍とありて舊枝の外ハ別ハ新枝と生  
てその枝ハ多くハ獨枝なるもこゝりありて西土の説ハ  
獨枝双枝と以て竹の雌雄と分ち筍ハ多く雌より生と  
るこゝりありハ誤きを扱またけハその節小黄牙ありて  
よもして推上の數節のまた枝葉なきこゝりとも一道の四

所ありてこゝりくの下節全身ありてうら圓きものハ  
その状異なりてされとも毎節下の粉白色なりハ二竹大  
畧相同し葉ハ三葉四葉或ハ五七葉と以て一葉とされ  
てこゝりもちくよりハ稍長大稀疎ありて且毎葉下の小毛ハ  
て二三分許の細毛ありてその色黄褐ありて籜の上辺ハ  
生毛も毛よをも稍細し又此竹年とて老竹とありて時  
ハ四月のころ新葉と生せんといふも枝梢皆去たれて  
遠くこれと望めハ頗る小竹の竹実と生毛ハ彷彿た  
る凡またけハ其いと俗ハ竹肉と呼ていとこも  
いまたるの若葉と新らにをちく  
よも厚くして性最堅勁なり和漢三才圖會ハ山州嵯峨

豆州大島

柴毛の伊豆の大島ハ古より大竹あり事と  
きりぬこれよりぬき大島ハ蓋し並山あり

傳聞の誤り  
ふる

和州内山遠州瑞雲寺豊州筑州皆佳に見え

たゞ其凡土に應むべきに應せざるにさらぬといふに或

ハ樹木の陰にありて殊小日光をうけざるものハ其竹

晚軫にして万竿並立といふとも常小風のたゆみ動揺

せらるゝものハ甚勁堅なり又節低きものを佳品三

秋採るものと上品を収旧より弓材小用あり竹ハ皆

ま竹より山城志小葛野郡太秦岨城二村産者勁堅とい

ふとも今ハ同郡八幡山又産るものと以て最上三

且其弓材小きを取一跡のいと厚き根本ハまへて刀劔

の目釘小用うらといへる収またけの筍ハちかくし

おろしを五月のころを生しその籬上小柴垢點あり其

長大なる味少しく苦くや、發と帯といふともとの

地上と抽出ること僅小四五寸の將根下と深くわを穿

らて採得るものハ味殊小耳美にして淡竹筍より勝

れりこれ予常お試るころなり

和漢三才圖會云苦竹有白有紫其筍味苦穉莖其竹色

青節間不促大者周一尺六寸長六七尺

大和本草云苦竹國信真竹ト云筍ノ味微苦ハチクニ

ヲトレリ筍生スル事方ソニ其大ナル者周一尺餘其穉莖



白色斑文アリ用テ筍トシ履ノ緒トス其外用多シ

庖厨備用和名本草云苦筍マタケノ子ナルハシ諸家々

ハ苦竹筍ヲ最貴トス然レトモ苦竹ニ二種アリ其竹粗

大ナルハ味殊ニ苦ニ竹肉アツク葉長大ナルハ筍ノ味

スコシ苦ニ倍ニ甜苦筍ト云食品ニヨロシ

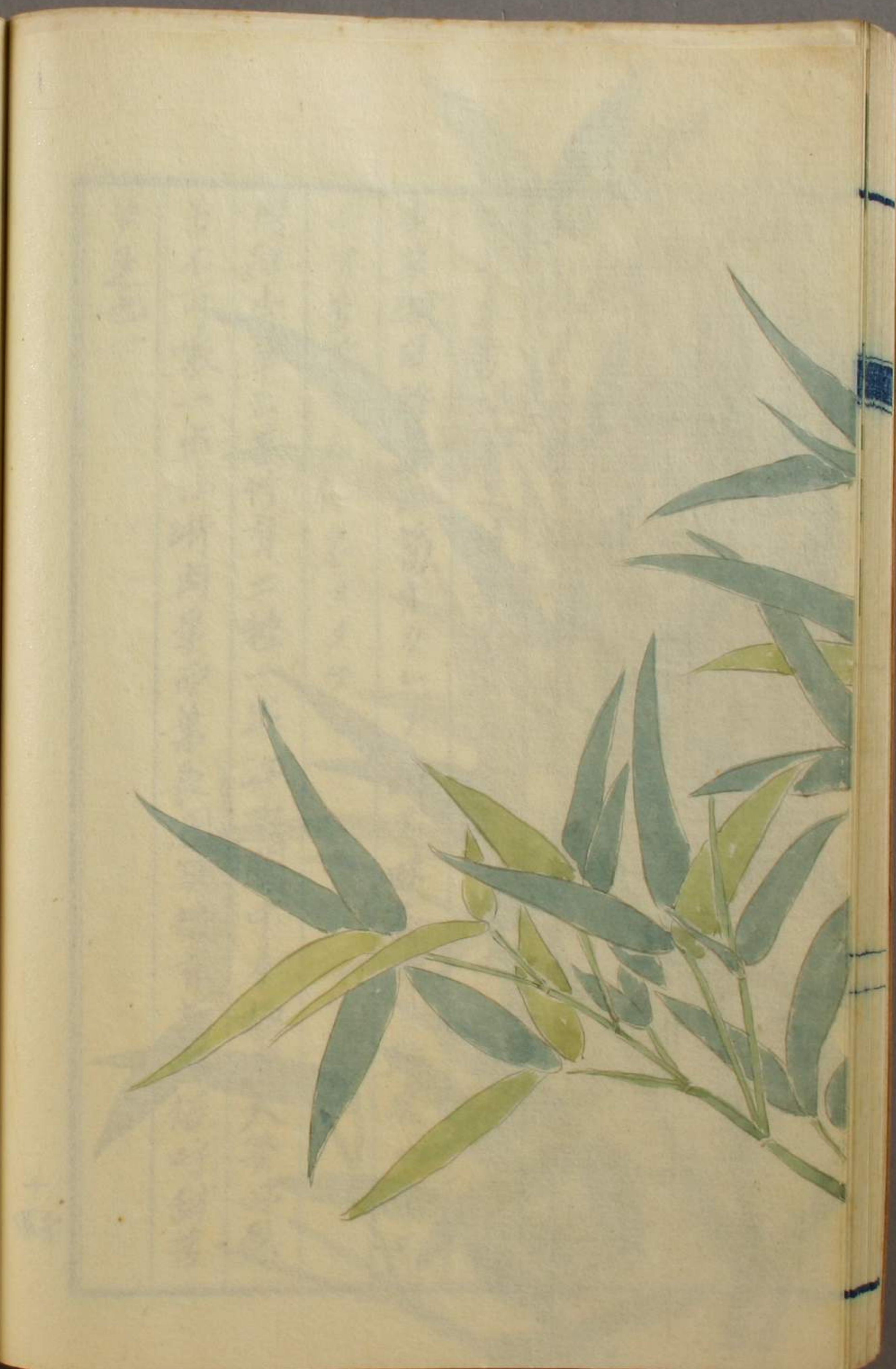
本草綱目啓蒙云筍オクレテ出テ味發穉ニ斑矣アルモ

ノヲ苦竹ト云俗名コタケ

四經本草云苦竹有二種一出江西閩中木極粗大筍味殊

苦不可噉一出江浙肉厚而葉長潤筍微有苦味俗呼甜苦

筍是也







竹有九方有二種一  
葉似菊味苦  
出古





竹譜詳錄云苦竹屬：有之其種二十有二北方有二種一  
種節稀而堅厚叢生枝短葉長一種與淡竹無異但筍味差  
苦江西及谿洞中出者本極大筍味甚苦不可食浙西出者  
筍嫩者可食云々

閩書南山志云苦竹筍苦而味佳

釋名

またけ 増補多識藪本朝  
食鑑會用竹筒便

本草一家言小まハ班字の意なりまねら竹の省呼也

ところも

小かたけ 類匡抄多識  
藪宜梨本草

ふかたけハ苦竹の義なりなる竹とめう竹といふ  
ハめきと同名異物なる

苦竹 名色別録  
目録本草

台州府志云苦以筍味苦故名

甜苦筍 目録本草

此筍味甜にして苦と帯ふ故に名づく

心誤

和漢三才図会云苦竹和名加波多竹其筍穉菜滋味苦平  
云々

大和本草云苦竹國俗異竹ト云又真竹ト云

案ニ異竹ハはちく類の耳竹よりてかえ竹ハなる竹  
の苦竹なりを此ニ説並ニ非なり又真竹の苦竹の此  
邦ニ渡りしハいつきの頃ちりあとの初と知られし  
いつしと尾原性全の續医抄ニ淡竹とから竹と訓し  
苦竹とわう竹と訓まとのうら竹ハ異竹の意なりふ  
か竹ハ苦竹の義なりを此にあらたけハるよたけ玉の  
めちりの味苦きとのとさうてあらさうハ今ニ同  
事なりと以て多識篇中ニ苦竹和名にあらたけ今案ニ  
末太計ニんえわらさるるをま竹の苦竹の渡りニハ  
嘉慶丁未より以前の事なりとあらたけたり凡竹の

種類甚だ多しこいへともま竹うらと外小極めて長大  
うの竹ハあましく好むここの竹とこと古よきあひ  
竹こいといふれ突ると和名鈔に楊氏漢語抄と  
引て淡竹を以てあかたけと訓し却てま竹の苦竹の  
長大なるものと載せしむる其頃まとい淡竹うらと外  
に長大なる竹ハあきここ明らけしと好む三才図会  
よま竹の苦竹と以て川竹の苦竹とせしハ其物と混  
同せしもの多し終に絶て古小この竹るきここと知ら  
ざる誤りなるを

本草一家言云護基竹和名末竹

案ふまたけハ五月節と生し其味少しく苦きとの  
うらふ今以て護基竹とすハ誤きと護基竹ハ江南  
圖史に四月生笋而甘と云えたるよりその義ハ明ら  
けし

かまたけ ぬま竹 女たけ

川竹ハ旧よを吳竹臺ふむらひて神溝道きめたる植ら  
きし竹少く古物あふ常用竹或ハ名湯竹といひ俗ふな  
い竹一名とんち竹一名めたけ一名みかま竹一名ふか  
竹といひ漢名とす苦竹といふ其幹正四かしく高さ  
一丈五六尺或ハ二丈許し其節の状正節なたらか

二隆起して下節の籜と生せし所ハ其間男竹小比ま  
ハ中一疎よりして節に相去ること凡八九寸を或ハ一  
尺五六寸小至る此竹新年のものは大畧三枚より二年  
に至れども三枚の間別小ニ小筍を抽出せし新旧相交りて  
五枚より又新年のものといつともその中幹より以  
上ハ始より五枚或ハ稀小六枚を生じるとあり葉ハそ  
へて細長よりして長さ八寸廣さ六分許りと或ハ新枝旧  
枝よりを廣秋の異なりことありといつとも皆六葉  
を以て一朶ともなり此竹の性より或ハ四葉五葉なり  
もあり其六葉のうちありのきこ枯落しゆく必ず全

形ハあらたまた延喜式小川竹ありこれハ其竹前  
條より細小より籜竹より中より大なりとさしてい  
ひしを別種よりあらたに此竹性湿より耐て朽腐むる  
こと最遅きより旧より人家宮殿の壁の棧にまぶ  
か一拍光高といへり舞人興福寺筆摩會の時との寺の  
垣壁の竹と採て笛小作るとと即支丸と名付累代相傳  
して則房の世までありしと詳小體源抄より見たり  
今俗小女竹と以て籜笛草刈笛を作るとのハ即この遺  
風なりしとこれより廣傳本草小此竹と以て本草細目小  
載る所の笛竹なりといひしとまた意味あり又筆管竹

秋竹の類を共々竹譜詳録に記す蓋し女竹の類なる

一

萬葉集卷第三 秋 石田王卒之時丹生王作歌云名湯竹乃

トウヨシ 十縁皇子云云

又卷第七相聞吉備津采女死時栞本朝臣人唐作歌云秋

山下部留妹奈用竹乃膳達依子等者云云

延喜式 内百寮 云御輿一具云云蓋一枚 長六尺廣五尺四寸 蓋椽料篁

子木廿六枚 笠椽 蓋下椽料川竹十株

又 織部 云凡雜械用度料篁竹河竹各百株每年山城國進

和名類聚鈔 類 云苦竹四聲字苑云苦 音与苦同難色立或云苦竹加波多計本

朝式用河竹二字 竹名也

山槐記云治承二年十一月十二日御座奉勅切御腰緒云

安倍資忠遣切生氣方東河竹即持参 口徑一寸許亮重

衡朝臣取之参御前作竹刀 只用削作刀方不再云云或用銅刀今度用竹也

徒然草云吳竹ハ葉不とく河竹ハ葉とく河竹ハ葉とく河竹ハ葉とく

きハ河竹仁壽殿の方ふら植らせハ吳竹ハ

八代集抄云かえ竹ハ縷皮似蘆竹也

體源抄云助支凡ハ倭竹也或人云昔興福寺雄摩會時

舞人拍光高寄例ニ任ラ二廳屋ニ著テ鋪食具屋星霜多積

テ垣壁半ハ穿ソ助支ノ中ニ一竹アリ留竹ニヨシ土中

ニテ年序ヲ歴トイヘ凡其様未変光高截テ笛竹トス果  
シテ優美ナリ累代相傳ヘテ則房ノ世マテ有之今ハ傳  
ル人ナキ也

大和本草云女竹ハ淡竹苦竹ノ内ニ雌雄アリ其雌竹ニ  
ハアラス國俗ニ女竹ト云テ葉モ身モカハレルアリ大  
竹トナラス皮オキス故ニ皮竹ト云又苦竹ト云筍ノ味  
苦キ故ナリ真竹ノ漢名苦竹ト云ハ別也吉田兼好カ  
曰吳竹ハ葉細ク皮竹ハ葉廣シト云一リ又小ナルヲハ  
篠竹ト云女竹ニ二種アリ節高ト節低トナリ葉ノオ竹  
小節の高  
筍ノ味苦クシテ真竹ニ是オトル壁ノ材ト  
きとの関中  
小絶てちし

ニ簧竹ニ用ヒ菓ノ筍トスルニマサレリ民用多シ

紹興府志云苦竹味苦不堪食有黄苦青苦白苦紫苦幹細  
而直可以爲筆管圓經致出筆管是也

竹譜詳錄云筆管竹出廣右山中節田心一如苦竹大者止  
中華管作火砲者取去燭花之筒

又云秋竹生七洞山中大者不過拊指許枝幹柔弱葉長細  
大概如四季竹興化軍尤多指去篾耐濕遲腐

和歌

後撰和歌集卷第十八雜歌

女ととちちのつゆふのひかま〜りか〜と久〜とむと

つまきりりきまを十月そのまふあね人の心こつひ  
言のまをいふゆきこまをいひつひのまをいひまを  
竹の葉ふかきつひをいひつひのまをいひまを

よみ人しる

うららまぬあふなうねた。河竹ハワリまのまの秋  
とらまぬき

堀川院御時百首

竹

権中納言國信

木枯ふその、河竹かたふらふたひけとらハうそら  
さうりりり

夫木和歌集卷第廿八 藤歌

光臺院八道二品親王家五十首竹霜

前中納言定家卿

五代まてなまそゆまゆかを竹のまたかひけふ  
おきそふ

文治六年廿河入内所屏風 隆信朝臣

久しうき君あ世まその川竹まのあまを  
のを

舊院攝政家百首

從二位頼氏卿

風あけなまきさふあゆ川竹のあまを

るはうれ

弘長元年百首みうの竹

常盤井入道太政大臣

百首のたまのみきんのみうの竹君の代なかくうあや  
そめらん

古今和歌集卷第十七 雜歌

寛平の御時ふとろ二のまう官ふめさけ侍り

りり時山東宮のさゆらひまそとのこもものさけ

たうらんりりつゆそあまみりり

夏原のたふめき

たう竹のよあさうらん神楽のあきぬくとのそふ

ころうれ

堀河院御時百首

竹

藤原頼仲朝臣

鶯のねくらふとろのたう竹のつりまの枝のよまよか

そらん

紀伊

風ふあそとなむくわうらなう竹のあそふゆりくあをけ

あつらぬ

夫木和歌集卷第十八 雜歌

三島社七百首歌

権僧正公朝



たす竹のこぼる風の涼きい一おのたそく秋やき  
ぬらん

天元四年四月小野宮歌合 旅人しうた

秋まらぬい海うと見いなる竹の下るとねさきこふ  
こそあをりき

釋名

川竹 古今和歌集 延喜式  
和名類聚抄

大和本草小川竹と皮竹と作るこれハこの竹年と造  
るといへともその穉落ることなきふらとて也葉ふ  
川竹の皮竹ともいひりふともその本義より造らばと

徒然草と御溝とちの成ハ河竹を名といひりふれ  
ハ古小河竹と作れりハ即御溝竹の上畧ふとも知へ  
りらに扶本集と載る常盤入道の歌と百敷の玉の砌  
の御河竹と見えたるまた大和國の方言といひみかま  
竹の名ありみうまの蓋しみのとの訛轉なり

奈用竹 萬葉集

名湯竹 全上

新録考云奈用竹名湯竹ハたなやのあかしの湯とな  
りしかあか竹と聲こりつるなる竹ハ女竹とて皮竹  
ともしふなるや音通つるといひ詞草小花にもあ

也ハ葦の義あり其土のいといふこいといふこい共  
 和名抄小西節間依云與といんたねをたす竹ハ即ち  
 ふよ竹の中畧して即長節竹の義ありつきと也  
 をんな竹 産物類纂

和漢三才図会小女竹と女子竹と作る

め竹 俗名

なひ竹 全上

なひハ即ち女の訛轉なり

みのまたけ 産物類纂

大和国の方言なりといふ







子加江付大和本草

此筍味至て苦し故に名づくこいし

苦竹

和名類聚抄引四  
蓄字苑紹興府志

筆管

竹譜詳録

此竹筆管に作りし故に名づく

秋竹左工

正誤

萬葉集抄云なる由にけハ唐竹とす

葉少竹ハ竹ハ即俗にす少竹ハ唐竹抄の一本

二名の竹ハ唐竹とす唐竹ハ唐竹ハ

事明らるる

志ぬ 一の

志ぬ一名一の一名をとだけハ淺名と後とつゝ水ハ  
延喜式かいつとゆも小川竹の中ハ小かたとのありて今所  
在極めて多しとの幹深青色よりて高さ八九尺との枝  
ハ五枝かたともあはれと三枝りともありてまへて一様な  
らば凡葉篠のこゝきハ年と經るこゝきハ一節の間九枝  
或ハ十枝と生まれりとも此竹ハ馬のらばとの葉長さ七  
八寸廣さ四寸分りして每莖六葉と一葉を以て此竹ハ四  
五月の頃ハ生し青色のりて味至て苦しこれハ知名抄

よハ一のの長間筍よりて此筍をた抽出て忍ちよ若竹  
とちハ時ハこの節上節下並に粉白なり事小川竹より  
と甚し一種伊豆の大島小産をりとのと俗ハ大島竹と  
いふ今切かく此竹と以て度砌の藩籬とまその竹細長  
よりて節間殊小長し一説ハ此種ハ 有徳廟の亦代の  
事ありて一矢竹より代用するきこ上意ありてその節間  
又種竹よりせりの今ハ多く繁新せりこつと又一  
種箱根竹あり矢竹よりせり細長よりて枝葉ハ大畧前  
條と相似てや細小よりて其葉より小落めたるよ  
よとて其より掃帚と名をよるゝとの性至て柔靱

竹を以て竹籠を作るもの多く此竹を用ゐ或ハ筆管  
と云ハ或ハ烟管と云ふもまた此竹なり云々此ハ嘉  
興縣志より云々竹篠云々延喜式云々此竹小竹  
徑二分長八尺といへるも此類と云へていひか  
扱此竹を舊く箱根竹といへるも其産地ハ必と相模  
國なり云々此竹と云ふも或人の説ハ箱根竹ハ伊豆  
國小産せしと相模國よりあり云々此竹と云ふも知  
漢三才圖會と云々此竹と云ふも伊豆國土産箱根竹と云ふも相  
模國の土産と云ふも此竹と云ふも或人の説ハ箱根竹ハ  
今の浅草海苔の類と云ふも或人の説ハ箱根竹と云ふも

日本書紀神代紀云篠小竹也此云斯奴

又神切云小竹宮小竹此

萬葉集卷茅八云細竹目人不顔面云云

又卷茅七云小竹之眼笑思而宿者云々

延喜式四時云凡六月十二月晦日御贖料小竹者月廿五

日申辨官令山城國採進之

又同云六月晦日大後御贖云々小竹廿株徑各二分長八尺

又同云中宮御贖云々小竹廿株

新撰字鏡竹部云葉篠方標反平竹也細竹也

和名類聚竹類引蔣飭韻云篠先鳥反知名之謂之伍伍

細々竹也

又上同引兼名苑注云長間笋今案和名之乃女笋青最晚生味大苦也

尚書禹貢云篠簜既敷

說文竹部云篠箭屬小竹也

嘉興縣志云竹篠偏地叢生葉大小不等可為籬為帚

和歌

萬葉集卷第七 雜歌

詠草

妹所茅我通路細竹為酢寸我通聚成細竹原

旋頭歌

池辺小槻下細竹菊嫌其谷君形見爾監乍將俣

右柿本朝臣人麿之歌集出

譬喻歌

寄草

如是也而也尚哉將老三雪零大荒木野之小竹爾不有九

二

又卷第十一 古今相聞 往來歌

寄物陳志

神南備能淺小竹原乃美安思公之聲之知家口

古今和歌集卷第十一 恋歌

題しらす

よみ人しらす

淡らふの心はの原をらまのゆきと今さらやいふ  
人しらす

山家集 雜歌

こまぢや好や風とこ山らふまの竹いりあゆしらす  
かきくして

釋名

よぬ 日本書紀  
万葉集

采小なふの反ぬま好とよぬ即まなふの義やを









通聲也。うねるとも玉篇にまた篠同上といふ。ハハ俗字  
うねと正文よりあらは

正誤

新撰字鏡云葉篠也志乃云：

案又吳郡賦云葉篋有叢劉涓子注云葉竹大如戟中突  
勁強文趾人銳之為葉是利又荀譜云葉竹實中籜屬荀  
堅大可食此說より時ハ葉と篠とハ別物也

和名類聚鈔云篠細竹也

案小廣韻上ノ細字を蓋し傳寫よりこの上の佐  
この字小より誤て細の一字と増入せしなり

和漢三才圖會云志乃一名長節間竹

案又竹ハ竹と一物なり、三のハハその形状  
既ハ大小のたりのありと一ツかして古人の  
いひ、事なきハ百葉集ハ名滿竹十縁皇子小竹之根  
笑思而みと名えたりとある、うねると葉名苑注  
ハ長間箒とシノメと訓たりハ此二種と混稱せしと  
ゆゑ、うねの事なり、三才圖會ハその誤りと受け  
つゝありたり

爾雅翼云箭篠也

會稽縣志云箭竹別名曰篠

按之篠と箭といふを別種として説文小箭矢竹也篠箭  
屬小竹也といひつゝこれの本義なるを邦人まゝに篠  
と以て小竹とよみ箭と矢竹と訓めりハ即和漢暗合  
なりその篠まゝに以て矢と作るべし故小万葉集小あ  
ふみのややんせのまぬと矢ふりてとんえねとこ  
れハ説文よまゝに篠可為矢といひつゝと全く同意なる  
然るにまゝに篠も箭も共々矢と作るべきを以てハ是  
は篠箭なるをいひつゝとこれと篠ハ小竹の統名とい  
て箭ハ即其うちの一種なるをいふと高貞ハ篠湯既敷  
こつゝも篠とまゝに箭のまゝとさしてつひとハ也

らに知ると此ニ説文箭と篠なるをいひつゝハ篠ハ小  
竹の統名なる事を知らざる誤なり

たかしの かしの

たかしの一名かしののハ漢名と篠竹といふ即女竹の  
一種長大なりとの書を近時琉球にもその種と傳へて  
今薩摩のめを佐藤成祐云一種の女竹ハ其大さといひ竹  
の如くよして極めて高く枝葉梢抄のまゝにわらわ生  
して下幹のハ絶てなくとの葉全く女竹小似て大なり  
凡此竹長さ百尺なりと以て行路八九号とこをわらわ  
其梢抄めらるふんりといひつゝとまゝに篠箭竹めるとの

葉薄一七廣一譜即遠若竹之小物理一七八二水之  
別種

竹譜云林於葉薄而廣或曰試斂竹是也

竹譜詳錄云蘇竹出襄州即龜山諸葛孔明祠中長百尺只  
梢上有葉土人多取作幡竿葉露筍亦美

本草第言云蘇竹長七十大只梢上有葉出襄州即龜山諸  
葛亮祠中

又云蘇箬竹葉薄而廣吳都賦所謂竹則質管蘇箬即越  
試斂竹是也柘枝是其中最細者

物類小識云襄州即龜山武侯祠蘇竹百尺梢上生葉





又云吳郡賦筴菴筴筴即試劍竹葉廣遠筴也

釋名

たかしの 俗稱

あかしの 名工

此竹之の竹小似て極めて高天を故小此二名也

筴竹竹譜大平所覽

葉之廣雅小筴謂也こるえたてを筴ハ具葉梢上之葉

茂との意あつらふら明らあ

心訳

庶物類纂云筴筴竹一名筴竹

紫小篠竹ニ篠筵竹ニ別種ありハ竹譜篠籬及ハ本草  
常言少也との種と二種小分ちて各條小出せしむ  
明りてあり

### 寒山竹

寒山竹ハ即篠竹の一種ありて漢名ニ箬篠ハ名拂雲帚  
竹といふとの質小似て節低く高さ七八尺大さ小指  
のここ一毎節相去る事六七寸許りて其枝ハ五枝或ハ  
十枝或ハ九枝ありたまに左右よりなりて互小大小の異な  
るあり凡女竹の類ハその初皆三枝なりとも年とつて竹  
葉を生む頃ハその旧枝の節間小又二小筍を生じて

新舊相交りて五枝とハなりともありて此枝の九枝  
十枝なりともありて事なりてその枝ハ五つて  
女竹よりとも殊小長くして繁一故小掃帚のたまふより  
しその葉また女竹よりとも細密なりて五葉或ハ四葉と  
以て一葉と一遠くこれを望めると頗る地層子草の状の  
如しこの種今本所押上村の種樹家よりありて其他可なく  
これありてここをきりて

竹譜云箬篠葉を掃所連莖性不昇植必也嵩崗踰矢稱大  
出尋者長物各有用掃之最長  
又云箬篠中掃帚細竹也特異他篠見廣志至大者不過如



箭長者不一丈根箭諸小なる小根の五疑抄篠茅下節  
生惟高陸動有所訃廬山所鏡也掃茅之逆潯陽人往々取  
下都貨焉

竹譜詳錄云篔簹出江浙間喜生山岡之上連延數十畝高  
不過七八尺大不踰指枝繁勁細者掃帚最長

又云排雲篔簹竹出廬山莖大如指竹抄細葉翠密如葉彼久  
採為方物以相遺贈張得之云名篔簹竹抄抄條等特異他  
孫中為掃帚

箭譜云排雲篔簹竹箭出廬山莖大如指竹抄細葉翠密如葉  
彼工人採為方物贈人謂之排雲篔簹竹纖長也





釋名

寒山竹

種樹家稱

案ニ画工の寒山拾徳の像とあるは、拾徳ハ両手  
ノ一軸と分披一寒山ハ竹、掃帚と携つたは、邦人此  
画の趣と主ニ一此竹は、竹を掃帚ニちまふより一  
きと以て遂に此名と命せられたる

箒條竹譜

説文云、箒、掃竹也。从又持、理、重、文、箒、有、彗、或、从、竹、玉、箒、  
云、箒、詳、惠、切、掃、帚、也。

拂雲篋竹

荀譜

案ニ拂雲箒竹ハ廬山の方言ナリ竹譜ニ箒箒性不卑  
植必也崑崗と見えたり此竹山岩上ニ植置て掃箒  
ニナリと云ふ一ノキと以て拂雲の名と命せしや

正誤

竹譜詳録全穂品中篠竹條竹譜と引て箒箒と載せし  
異形品中台竹の後ニ別ニ拂雲箒竹と載せて各條ニ  
案ニ箒箒ノよりハ拂雲箒ハ即竹譜の箒箒なりこそ  
ハその形状のちるきのみならず産地もまづ全所  
にてもあきらかにしるべきと李息有ハその名のおふ  
しるしるよりまづひみちをふしるしる各條に出せ

ハあやまらば

桂園竹譜卷之一終

